

2 継母

赤水さん 地図に広がる いきいき人生

江戸時代中期の1779(安永8)年、数え63歳のとき、日本で初めて緯線と方角線の入った全国地図「改正日本輿地路程全図」を作製した常陸国赤浜村(現高萩市赤浜)の長久保赤水さん(1717〜1801)。生家は水戸とみちのく仙台を結ぶ街道に面していました。地元では「奥州道」と呼んでいたように、生家前は往来する旅人が絶えませんでした。

「ここが赤水の誕生地です。けど彼がここにいたのは8歳まで。その後、彼の父が分家するからです」

高萩市赤浜の長久保総本家の跡地に立つ「長久保赤水誕生地」と深く刻まれた石碑の前で、一族の長久保片雲(本名・源蔵)さん(89)はこう説明してくれました。現在ここには片雲さんが住んでいます。

片雲さんに車に乗ってもらい、旧街道を通って赤水さんが暮らした分家に向かいました。「赤水はこの道を何度も往復したし、後に日本地図を作った伊能忠敬

肝っ玉おかんあつての「偉業」



長久保赤水の誕生地を紹介する長久保片雲さん=いずれも高萩市赤浜

赤水旧宅の門の一つ。旧街道に面している



も、東北旅行に向かった吉田松陰も歩いたものです」

途中、赤水さんの墓があり、参拝。黒ずんだ赤水さんの墓石の右に父の善次衛門、母おしげ、継母おかの墓が並んでいました。赤水さんの旧宅まで車で5分。こちらも旧街道沿い

です。いまの国道6号と交わる北茨城市との境付近。赤水さんが測量をせずに詳しい日本地図を作製できたのは、家の前を行く旅人ら呼び止めて地名や地形の話聞いていたからなんですよね。そしてここは両親亡きあと、赤水さんが継母のおかんとともに農業、学問に励んだ場所です。

善次衛門と再婚したおかんは1年たらずで寡婦となり、実父から実家に戻れと迫られます。けれど、夫の遺言を守るのです。善次衛門はおかさんを病床に呼んで伝えます。「私がいなくなればこの子は孤児になる。おまえが腹を痛めた子では

ないで頼むのは心苦しいが、これから先も面倒を見てもらえまいか」と。

おかんは遺言を受け止めて、赤水さんを無事に育てることを心に誓います。雇っていた農民夫婦とともに田畑を切り盛ります。

赤水さんにとってなによりも心強かったのは学問に打ち込むことを理解してくれ、温かく見守ってくれたことです。長久保本家のおじが「本を読みながら農業をやるとは何事だ。農民のせがれに学問は無用だ」と赤水さんをたしなめたのに対し、おかんは「ひとは誰でも道楽のひとつやふたつはあるもんで、ばくちや酒飲みなんかより文章を学ぶほうがいいにきまつてましよ」とかばうのでした。

おかんは赤水さんが14歳のとき下手綱村(現高萩市下手綱)の医師、鈴木玄淳が開く私塾に通わせます。赤水さんは他の塾生と切磋琢磨して、次第に才能を開花させていくのです。

(フリーライター・岡村青)
 原則木曜の掲載です